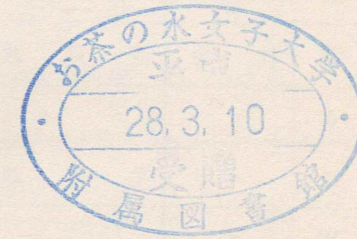


一般教育科目
総合コース

生 き る

—人間と社会—

昭和 58 年度



お茶の水女子大学



講 義 日 程

(講義日時=土曜日第三・第四時限 10:20~12:00)

(一般教育2号館201室)

月	日	分野	担当講師	月	日	分野	担当講師
4	16	序 説	大 塚 教 授	10	8	人 文	鷹 野 講 師
	23	"	"		15	"	"
	30	人 文	高 木 教 授		22	自 然	塩 田 教 授
5	7	"	"	11	29	"	"
	14	自 然	松 本 助 教 授		12	人 文	小 倉 教 授
	21	"	"		19	"	"
	28	社 会	浅 見 教 授		26	"	中 川 教 授
6	4	"	"	12	3	"	"
	11	"	荒 川 教 授		10	自 然	式 教 授
	18	"	"		17	"	"
	25	自 然	石 和 助 教 授		24	社 会	原 助 教 授
7	2	"	"	1	21	"	"
	9	セ ミ ナ ー			28	セ ミ ナ ー	
9	10	人 文	三 木 教 授	2	4	予 備 日	
	17	予 備 日			18	後 学 期 末 試 験	
	24	前 学 期 末 試 験					

目 次

序 説	大 塚 雅 彦	1 頁
第 1 講 「生き方」について	高 木 きよ子	2 頁
第 2 講 血液の科学	松 本 勲 武	3 頁
第 3 講 サルからヒトへの生き方	浅 見 千鶴子	4 頁
第 4 講 食糧需給と食生活	荒 川 信 彦	5 頁
第 5 講 遺伝学の立場から	石 和 貞 男	6 頁
第 6 講 中世人の死生観	三 木 紀 人	7 頁
第 7 講 縄文時代の食料をめぐる	鷹 野 光 行	8 頁
第 8 講 「生きる」と有機化学	塩 田 三 千 夫	9 頁
第 9 講 生 と 死	小 倉 志 祥	10 頁
第 10 講 あるフランス人の生活と意見	中 川 信	11 頁
第 11 講 「生きる」限界の地域の自然	式 正 英	12 頁
第 12 講 極限状況と日常生活	原 ひろ子	13 頁

総合コース

「生きる」

——人間と社会——

高木・三木・鷹野・小倉・中川（人文分野）

浅見・荒川・原（社会分野）

松本・石和・塩田・式（自然分野）

一般教育科目の各分野にわたる共通な一つの主題について、総合的に学ぶものである。

主として二年生対象

履修単位数：4単位、ただし二年度以上履習した場合計8単位までが一般教育科目の単位として数えられる。

なお、各分野で最低8単位修得すべき単位には含まれない。

セミナー：総合コースの成果をあげるため、前・後期、各1～2回程度セミナーを行う。

試験方法：前・後期末に試験が行われるが、その際人文・社会・自然の各担当講師から試験問題が示され、学生は少くとも二分野にわたって三題選択し解答しなければならない。

序 説

高木三木

大塚雅彦

“不確実性の時代”という語が象徴するように、こんにちは一瞬先がわからないような不安の時代である。未来は予測できないし、政治経済的にも、科学技術の面でも、また思想や文化の上でも、思いがけないことや急激な変化などが起りがちであり、時にはわれわれの“生”の根源が脅威にさらされることも少なくない。したがって、われわれはこのような時代にどのように生きたらよいかを真剣に模索せねばならないし、また、困難な時代に生きた過去の人々の英知にも学ぶ必要がある。文学者と社会との関連についていえば、例えば「トニオ・クレーゲル」に於いて「芸術家はどこか超人間的な非人間的な存在であることが必要である」とさえ言ったトーマス・マンが「戦闘的人道主義」や「社会的デモクラシー」を説くに至ったことや、ロマン・ローランが「私は我にもあらず政治に入って行った」ことの中には、近代ヨーロッパの卓越した知的内面性が行動性に展開して行った跡づけを見得るように思われるし、また逆に「紅旗征伐ハ吾ガ事ニ非ズ」と自書した新古今の歌人藤原定家の“美の使途”としての強烈な純粋性も一つの生き方だろう。困難な時代におけるさまざまな生き方はあっても、人間と社会とのかかわりの中で主体的に生きることを探るためのよすがとして、今年「生きる — 人間と社会」というテーマを選んだ。そして、大まかにいえば、文教育学部の先生方には、或る社会条件下に生きた人間の生き方を、理学部の先生方には現代の自然科学から見た生命の問題を、家政学部の先生方には現代に生きる人々の姿やその生活の基底にある問題を、主として講じていただくようお願いした。学生諸君は自己の専攻以外の分野のお話をきいて視野を広め、“いかに生きるか”を探求する絶好の機会であるので、積極的に参加していただきたい。なお、私は二回お話をする時間を与えられたので、一回目は本年度のテーマについてのオリエンテーションをし、二回目は、長年私がかかわってきた犯罪者や非行少年等が、例えば刑務所や矯正施設のような極限状況の中で、どのようにその“生”を見つめて生きるかについて、彼等の手記や文芸作品等をも用いながら、お話したい。

第1講 「生きかた」について

高木 きよ子

「生きる」ということはさまざまな意味をもっている。生物体としての生も精神的な「生きかた」もある。この「生きかた」にしても人間それぞれの人格によって異なるし、それを支える社会慣習、文化の伝統によってもさまざまである。

また「生きかた」は、その内容と目的によって、よりよく生きることを志向する。そこに「生きがい」が生まれる。生きているということの価値を理想として追求し、それに全心をささげつくす。それはその人の「生きざま」としてとらえられる。

哲学も宗教も、「生きる」という問題に多く関わってきた。生の問題は、ごく当り前のことでありながら常にその意味を問われている。その意味を宗教的にとらえ、宗教的に生きるということに焦点をあわせて考察するとともに、「生きる」ということの裏側にある「死」についてもふれようと思う。

参考文献

広瀬京一郎 「生きるということ」 頸草書房

藤田 富雄 「哲学へのいざない」 大明堂

宮城 彦弥 「日本人の生きがい」 朝日新聞社

神谷美恵子 「生きがいについて」 みすず書房

岸本 英夫 「死をみつめる心」 講談社(文庫)

第2講 血液の科学

松本 勲 武

「血」という言葉は、「血が通う」、「血が騒ぐ」、「血で血を洗う」、「血のめぐりが悪い」、「血は水よりも濃い」、「血湧き肉躍る」……など、日常会話や文章中に数多くあらわれる。また、血液型相性学などを読んで楽しんだ人も多いのではなかろうか。実際、「貧血で青い顔をしている」、「高血圧で苦しんでいる」、「輸血の世話になった」などという話もよく耳にする。このように我々が日常深く血とかかわっているのも、血液(血の科学用語)が休むことなく体の中を駆け巡り、生命を維持する上で欠くことのできない重要な役割を果たしていることを考えれば当然のことかもしれない。

この講義では血液の科学的側面を紹介したい。

参考文献

磯貝 行秀 「血液から何がわかるか」 至文堂 1981

石山 昱夫 「血液型の話」 サイエンス社 1981

ニュートン 昭和57年2月号「血液」 教育社 1982

三宅 直人 ポピュラーサイエンス昭和57年9月号「血液ががんばる」 ダイアモンド社 1982

参考文献

長瀬 洋子 「細胞の旅行のイロ」 丸形書・複式、著-リッパ・ベックリテ

「やまのなかに人間が」 丸大原田幸、著-リッパ、著-リッパ

書籍外販部

第3講 サルからヒトへの生き方

浅見 千鶴子

われわれ人間は万物の霊長であって、動物ではないと信じている人も多いことであろうが、人間も動物の一員であることは否定できない事実であり、脊椎動物の中で、哺乳類の中の霊長類に属しているのである。霊長類というのはサルたちのことで、ヒトとサルとは生物学的に最も近縁なのである。サル類の中の類人猿（ヒトニザル）といわれるチンパンジーやゴリラたちとヒトとは共通の祖先から分かれたと考えられている。

サル類は初めは下等な哺乳類である食虫類（ジネズミやモグラ等）に近いが、だんだんに進んでサルらしい特徴を備えるようになる。その1つに^{オヤノビ}拇指の対向性がある。これは5本の指の中、拇指に当る1本が他の4本と向い合って、物を握る働きがあることである。はじめサルは4本の肢すべてで木の枝を握り、体を支え、樹上生活を始めた。ヒトになると樹上から草原に下り、後肢の2本で直立し、歩行するようになった。ヒトの特徴はこの2足直立から始まる。前肢は体を支えるために握る必要がなくなり、自由に拇指を使うようになった。大脳は発達するようになり、今日の進化に至ったといえる。

このようにヒトはサルではなくなったが、その出発点はサルたちと共通なところを最も深くもっているものであり、ヒトの今日の進化繁栄はサルと共通な基盤の上に築かれたものであることを忘れてはならないのである。

本講において、ヒトが生き方の中でサルから如何に奥深く、数々の特性を受けついできたか、如何にしてヒトらしくなったか、人間の特質は何であるかを考えたい。

参考文献

- アリソン・ジョリー著、矢野・菅原訳 「ヒトの行動の起源」 ミネルヴァ書房
R. リーキー、R. レヴィン著、寺田和夫訳 「ヒトはどうして人間になったか」
岩波現代選書

第4講 食糧需給と食生活

荒川 信彦

わが国の食生活は所得水準の向上、食糧の需給条件の改善にともない著しい変化をとげ、食生活の多様化が進んできている。このような食生活の変化は体位の向上、平均寿命の伸びなどにみられるように、国民の健康増進に大きく寄与している反面、過剰栄養、栄養摂取のアンバランスなどに起因する疾病問題も一部には発生しつつある。

一方、食生活の素材としての農水産物の供給に関しては主食である米の消費が減少し、減反などの農業問題を起しているばかりでなく、米を除く農産物の輸入問題及びその安定供給、国際的な漁業規制による水産物の漁獲問題など新たな食糧問題が提起されている。

このような問題は単に日本という単位ばかりでなく、発展途上国の食糧需給も含めて、地球全体の農業問題として考えなければならない。世界の食糧需給に関してはいろいろな機関から予測あるいは危機論が出されており、その対応は世界的規模で考えなければならないところまできている。

ここでは、これらの問題をめぐって、人口問題、現代の食生活、世界の食糧需給関係などを中心に考察してみたい。

参考文献

- 逸見謙三・立花一雄 監訳 「西暦2000年の地球」 家の光協会、1980
食糧栄養調査会編集 「食料・栄養・健康」 1982年版

第5講 遺伝学の立場から

石和貞男

石和貞男

現存の生物が祖先から引継いだ生命とはどんなものか遺伝学的側面から、かつ進化学的視座にたって考えてみたい。すなわち、それは遺伝情報を解読しわれわれの生き方について死者が残していたメッセージを解読することになる。すでに分った内容をいくつか紹介してみたい。さらに、メッセージの改変・編集がDNA組換え操作によって可能となりつつある経緯にふれる。(ここまでを第1回。)

また生物はひとしく集団としてのまとまりをもって生きていることに注目したい。集団を構成する各個体はすべて遺伝的に異なる。すなわち、集団には一般に遺伝的変異が豊かに存在するが、しかしその量はある程度制御されているようにも見える。何等かの理由によって、変異が過剰になった集団、あるいは変異が消失した集団は滅亡し易い。現代のヒト社会をこうした観点でながめてみたい。(この部分を第2回にて。)

第6講 中世人の死生観

三木紀人

三木紀人

死は前よりしも来らず、かねて後ろに迫れり。
(『徒然草』第155段)

死というものを身近に体験したことのある人にとって、深くうなずける指摘であろう。特に、戦乱や天災などがあいついだ中世日本人には、ひとしおその実感が強かったはずである。死をこのように意識したとき、生の味わいはいかなるものとなるか。中世文学を糸口として、その問題について若干考えてみたい。

参考文献

- 方丈記
- 発心集
- 平家物語
- 徒然草

第7講 縄文時代の食料をめぐって

大 塚 三 郎

鷹 野 光 行

日本列島の先史時代である縄文時代の人々はどのようにして生きていたのか。生きるための食料を得るべく、毎日のように山野を放浪していた姿が思い浮かぶかもしれないが、果たしてそれが縄文人の実像であったのだろうか。もちろん彼等の行動は大部分が生きていくために食料を確保することにあてられていたことだろう。しかしその生活にはある程度の規則性があったようで、決して行き当たりばったりのその日暮らしではなかったようだ。

縄文人の得ていた食料は、今日貝塚に残された種々の遺物から見てとれるし、泥炭地や水につかった遺跡、また火災にあって廃棄された住居址の中などからも発見されている。貝塚からは縄文人の得ていた動物性の食料について多くの情報が得られるが、植物性の食料は我々の目に直接触れる機会は多くはなく泥炭地や水につかった遺跡から発見される木の実や種子によって縄文人の食事の様子をみることになる。またこうした遺跡からは有機質の遺物が多数出土し、縄文時代に関する今までのイメージとはいくらか違う姿を見せてくれるようになった。

考古学は、遺跡から発掘された資料によって考える歴史学であるので、推測、想像は極力排し、遺跡から得られる情報によって縄文人の生きる糧やそれを得るための彼らの知恵について、考えていきたい。

参 考 文 献

楠本政助 「縄文生活の再現」 ちくまぶっくす 25 1980 筑摩書房

季刊考古学 創刊号 「特集 縄文人は何を食べたか」 1982 雄山閣出版

第8講 「生きる」と有機化学

杉 本 浩 一

塩 田 三千夫

表題の問題を、次の3点を中心に考える。

1. ホルモン、フェロモンを中心とする生体活性物質の化学。
2. 生体活性物質を人工的に合成するには、どのような問題点があるか。また化学者は、それを目指してどのような工夫をしているか。
3. 巧みに行われる生体内反応のしくみを解明し、これを模倣したりこれにヒントを得たりして能率のよい合成方法を得るために、化学者はどのような努力をしているか。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

「エッセー」(または「随想録」)の全訳。

第9講 生と死

小倉志祥

生きていることは常に感じられているが、しかしそれを考えることはむずかしい。生物としての人間を科学的に対象化して考察しようとすれば、無機物と有機物との区別に想到するが、これによって人間に生きることは意味が解明せられず、白骨に化した自己を想像するのみ。キエルケゴールの説くように人間にとって「死に到る病」は肉体の病気のみならず、精神的生の死としての「絶望」でもあることを思えば、生を問うことは限界状況としての死の思索を迫ってくる。これはまた、白鳥は死ぬときにひときわ美しく鳴くと、毒杯を前にして語ったソクラテス像を伝えるプラトン以来の靈魂不滅論ないし不死性論と結びついてくる。

本講はこの要旨に基づいて、下記の西洋思想史の文献に即して「生と死」について講述する予定である。

参考文献

- プラトン 「パイドン」
- ポエティウス 「哲学の慰め」
- 小倉編 「近代人の原像—ルネッサンスの倫理思想—」（弘文堂）
- カント 「純粹理性批判」、「実践理性批判」
- ハイデガー 「存在と時間」
- ヤスパース 「実存解明」（「ヤスパース・マルセル」中央公論社 世界の名著75）

第10講 あるフランス人の生活と意見

中川 信

運命によって与えられた人生を、いかに生きるべきかを探求するために、ミシェル・ド・モンテーニュ（1533-92）は裁判官の職を辞し、自分の領地に引退する。そして38歳の誕生日に、この引退の決意を書斎の壁に書きとどめ、読書と思索に没頭する。ギリシア、ラテンの古典を読み進む一方、やがて彼自身語りはじめる。その気の赴くままの考察の記録、これが有名な『エッセー』全三巻である。その最終章「経験について」を中心に、彼が生きていること、そして死ぬことをどのように考えたかをさぐってみたい。

参考文献

- 『エッセー』（または『随想録』）の全訳、
- 関根秀雄訳（白水社）
- 原二郎訳（筑摩書房、岩波文庫）
- 松浪信三郎訳（河出書房）
- その抄訳
- 荒木昭太郎訳（中央公論社、講談社）
- など。

参考文献

- 1966 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1969 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1971 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1972 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1977 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1977 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1979 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1979 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1980 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝
- 1981 岩波大 [岩波文庫] 藤田 孝

第11講 「生きる」限界の地域の自然

野川中

式 正 英

人々は社会の安寧と個人の幸福を追いながら日々を生きているが、これを脅やかす環境の変化には敏感にならざるを得ない。人類は一見地球上に遍ねく「地に充ち」ているように見えるが、実際にはどこも一様と云うのではない。生きることを許さない自然条件をもった一部の地表があり、こうした限界の地域の自然は、温和で中庸な場所には想像できない程酷しいものである。

この講義では限界の地域での土地、水、気候などの性質や内容について、また人を含めて動植物がその付近でどのような形で生きているかについて、具体的な地域の例を挙げて示してみようと思う。地球上の不毛の土地は極地域、亜極地域、沙漠地域にひろがるが、これらの地域の境界は年々変動して定まらない。その原因は気候変化にあり、人類の生産活動や燃料消費が関与するとも言われるものの、氷期、間氷期の到来にみられるような、自然的変動が基本的な条件としてあると云ってよい。

高緯度地域では耕作地の限界が次第に南下したり、原住民の居住の様式が変化したり、またアルプスでは樹木限界高度が上昇しつつあるといわれるが、これらの現象に気候変化がどの程度に与かっているのだろうか。限界の地域ではなくとも、急傾斜地、裸岩地、地こり地、火山災害地、洪水被害地など「生きる」ことを限定する自然的土地条件の例は、我々の周辺にいくらでもある。これらをくくめて環境の限界条件としての自然とは何か、さらに文化や社会は限界の地域とどういう関わりをもって来たかなどを問題点としていく。

参 考 文 献

- 千葉 徳爾 「地域と自然」 大明堂 1966
半谷, 安部 「社会地球科学」 紀伊国屋書店 1966
王城, 旗手 「風土, 大地と人間の歴史」 平凡示上 1974
鈴木 秀夫 「風土の構造」 大明堂 1975
渡辺 光 「環境論の展開」 環境情報科学センター 1977
湊 秀雄ら 「地球人の環境」 東京大学出版会 1977
式 正英 「自然の博物誌<山>」 日本放送出版協会 1979
清水 正元 「砂漠化する地球」 講談社 1979
青木 晴夫 「アメリカ・インディアン」 講談社 1979
C. M. ターンブル 「アフリカ人間誌(幾野宏訳)」 草思社 1980
福岡 義隆 「図説環境地理」 古今書院 1981

第12講 極限状況と日常生活

原 ひろ子

厳しい自然条件の中で生き抜くということはどんなことなのであろうか。個々人が餓死や凍死の危険にさらされる時、(1)人は自分自身とどうつきあうのか、(2)人はまわりの人々とどうかかわるのか、(3)人は超自然とどうかかわるのかを考える。

物質的・経済的に恵まれた生活をしている人々が大部分を占める現代日本社会での日常から、ともすると見失われがちな「ぎりぎりの生」の姿を具体的な事例を通じて見つめることとしたい。

以下の参考文献を夏休み・冬休みの間になるべく読んでおいて頂き、その上で年度末の授業に臨んで頂きたい。

参 考 文 献

- 『極限の民族』 本多勝一著 朝日新聞社
『プリンジ・ヌガグー食うものをくれ』 コリン・ターンプル 幾野宏訳 筑摩書房
『イシー北米最後の野生インディアン』 シオドーラ・クローバー著 行方昭夫訳 岩波書店
『世界最悪の旅』 チェリ・ガラード著 加納一郎訳 河出書房新社
『生存者—アンデス山中の70日』 P. P. リード著 永井淳訳 平凡社
『子どもの文化人類学』 原ひろ子著 晶文社
『極北のインディアン』 原ひろ子著 玉川大学出版会
『生のかたち』 日高敏高・原ひろ子共著 思索社
『カナダ・インディアンの世界から』 煎本孝著 福音館書店

